

ちよつといし話

～ 母 ～

古今東西「おぎゃあ」と生まれて、母親の無い人はいません。ただ、空海大師、源空上人の様な徳者を生む母もいれば貧者を生む母もいます。ですから母となろうとする人は賢者を生むだけの素質を具備し、品性を兼ね備え、立派な子供を育てる事が出来る母でなくてははいけない。「瓜のつるに南^{かぼちや}瓜はナラズ。」である。「鳶が鷹を産んだ」とも言う人がいます。それは謙遜であり、褒め言葉です。少子化も問題ですが母親になる資格ありや？

昔、恵心僧都源信と言う高僧がみえました。上人は両親が高尾寺の観音様に3年間の祈願をして授かりました。故に上人は幼少より聡明でした。しかし不幸にして上人が7歳の時、父親が病死、母一人、子一人となる。父の遺言「我れ汝の幼きあいだに今^{こんじょう}生の別れを告げるは、遺憾に堪へざる次第なり。然れども老少不定は世の習いなれば如何ともなし難し。汝長じなば世の栄華^{とど}に心を止めず、出家して佛の教法を学び、我が亡き跡^{とむら}を弔うと共に、広く道法をこの世に布^しけ」と遺言^{くだん}件の如し。死後、賢母は子供の養育に傾注し、夫の遺言を無にしない、立派な出家となってくれるようにと心を砕いた。又、幼き上人も、高尾寺の観音様に詣で心願成就を祈念されたのです。上人9歳の時、縁ありて比叡山^{よかわ}の横川、良源和尚にて出家得度をする。第一の目的を達成する。しかし目的の達成無き時は生きて再び会う事の無い別れ、幼き上人の旅

立ち、母親の心情、悲しみは如何許りかと思ひます。頬を流れる涙後をたたず。それを見た使いの僧云く、「一朝の別れを惜しみて、悔いを万劫に残したもうな」と説く、夫の遺命もとより覚悟と涙を飲み込む母でした。上人修学に励み、別れて20余年名声益々広まる。本人もこれならと思ひ母に会いたい旨の手紙を出す、しかし母からの返事は「我等が御世の導きを頼んだのであって、名聞僧になれとは言つてない。おん身を思う母の情けは、決して母を思うおん身の心に劣れるにあらじ。然れども今はその時にあらず。暫しの対面をもつて、おん身の^{ぎょうごう}行業を^{さまた}妨げんこと^{はなは}甚だ心ならず、必ず山を下りたもう事^{なか}勿れ」故に、会えないと・・。その後、恵心僧都源信が母に会う許可が出たのは母の病状悪果、命終もまじかになつてからでした。使者の手紙には「かねて約束せし其の時は今まさに来たれる、我が命あるうちに急ぎお出であれ」と書き記してありました。上人急ぎ馳せ参じ、母の枕べにて浄土の法門を説く、母の信心深まり、母親云く「今はこの世に思い置く事もなし、一心に称念して、ひとえに往生極楽の期を待つべし」と、別れて62年なり。この母ありてこの子あり、恵心僧都源信こそ浄土教の開拓者と言えます。ある經にもろもろの世間において、何者が最も富み、何者が最も貧しきか、との問いに答えて、それは母がいれば富めるとし、母なければ貧しい、と説明し、父母に孝養せよ、そうする事は佛に供養する福と等しいのだと。説いています。母はあまりにも身近すぎて想いを馳せる事が少ないと思ひますが一度思念してみても如何ですか。父母の恩重し。